

賑わい応援談⑧

集いの場の大切さ 齊藤サツ子 (弘前市在住)



平成19年5月24日、鹿角市花輪に於いてNPOの通常総会が開催され出席したが、この中で「関善賑わい屋敷」のことが紹介され、その取り組みに感銘した。

「関善賑わい屋敷」は、総会の会場として設定されていたが、この名の通り人を集める魅力を十分持っていると感じた。古い建築物とこれまでの長い歴史があるからである。鹿角には、地域づくりコミュニティの素材が沢山あるということが特性であろう。

平成17年で100年を数えるという。平成18年には、有形文化財として国に登録され、保存と共に活用まで出来るようになったというので、とても良いことだと思った。この数年、この賑わいを保つために若者達が先頭に立って動き出し、文化伝承を進めているということに耳にし、人の魅力も十分要因になっているのかなと強く思った。

まず、そこに住んでいる人々が、今まで築いてきた文化を守る体勢だけでなく、自ら地元の人々が『動く』という役割を持つ体勢に変化したことが大きいと思う。人の集うところに人が集まり、会話が始まり、酒をたしなめ、食を楽しむ。特に旬の地元産を楽しむことは、とても心を癒してくれると思うのである。私は、数回ではあるがこの地を歩いて、癒しの景観を見つけることが出来た。宿泊の庭もその一つ。樹齢が相当ありそうな桂の木を庭の中心に位置していた。

また、「水の妖精」の住む所と言われる町の場所には、堰が水流を止めることなく勢いよく流れていた。関善の『関』は『堰』と同じく捉えるなら、人が集まり、人が集い、地域は発展していくことだろう。この総会に出席してそのことを実感することが出来た。

⑧ 10月12日 (金) 午後6時半より



落語と物売り口上 金原亭馬好 五街道弥助



奥座のステージ コンサート会場としても利用可能です。

下記のとおり申請します。

鹿角市観光ベンチャープラン支援事業認定申請

1. 事業名
関善観光パワーアップ事業

鹿角市いきいき商店街支援事業認定申請

1. 事業名
地域資源を生かす「まちなか観光」の展開と「市民観光」推進体制の整備

享月 日 曜日 2007年(平成19年)4月29日 日曜日

④ 7月8日 (日) 午後2時より



フォルクローレライブ ベル・ヴィエントス

私と環境



木の住まい考房 主宰 鈴木有さん

私たちの先人は共生の営みを大事にしてきた。自然と人間は共存すべし。そして、人の神が共存の関係を支える。いつ起こり、どんな揺れが襲うか。最先端の科学によっても、定かには分からない大地震に対して、日本の伝統民家はどう備えてきたのか。伝統民家は、多くの柱と横材でジャンクルジムのような立体格子の架構を造る。地震力を体内に受け入れ、揺れながら分散する。木のめり込みや滑りを起こす数多くの接合部で、そのひずみを吸収し、地震エネルギーを消散する。要所に設けた土壁は揺れを抑えるが、無理をしない。限界を超えたら、固い壁土だけを壊して、地震の衝撃力を削ぐ。たいていの揺れには、この木組みと土壁の構造で対処できる。

伝統民家に学ぶ共生の思想

さらに、人智の及ばない激震が襲ったら、自然石の基礎の上に置くだけの柱脚が滑ったり、浮き上がったたりして、過大な地震力が木組み架構に伝わるのを遮る。それでも大揺れして架構が傾いたら、厚板を柱の間に刺し通し楔で固める多段の真架構(土壁の下地)が、建物の倒壊を免れ人命を守ろう、と粘り抜く。被災の現場調査や震動実験の研究から、柱や楔で留める接合部が健全なら、大きな揺れの後も、架構は元に戻るこ

木は、顔の見える関係で想いを共有し、民家を造ってきた。木を育てる人や家を造る人たちが住まい手との絆が、永続可能な民家を生み出したのだ。日本の伝統民家は、その構造にも造る方式にも、共生の思想が色濃く認められる。

翻って、現代の技術は、自然の猛威も技術の力で押さえ込もうとする。目標とする地震力を想定し、壊さないように、揺れに強い剛性住宅をもつばら造る。

想定内なら性能は優秀だが、その想定を外れると何が起きるか分からない。どのようにして壊れるのか、さらに壊れたときどう対処するのか、ほとんど考えられていないのだ。修復も難しい。いまや住宅は、造り手と住まい手の関係が希薄な商品になってしまっている。

環境の世紀と言われる時代、私たちは謙虚に自然と向きあわねばならない。現代の技術観を見直し、民家の仕組みにこめられた叡智に学んで、地震への備えも共生の文化に高めねば、と思ふのである。

NPO関善賑わい屋敷特別相談役：会員 (近江八幡市在住)